

岐阜市芥見山田川河底採集の滑石製石鍋破片など

長屋 幸二

Introduction to a fragment of pan made from talc and some materials collected at the bottom of Yamada-gawa river Akutami Gifu-city

Koji NAGAYA

はじめに

当館が収蔵する考古資料は、昔の地表面採集品などが主であり、その多くは未報告である。しかるに、集成研究などでは採集資料であっても採集地が明らかであれば検討の対象となりうる。そこで、こうした館蔵資料を研究活動の俎上に載せるため、集成の対象となりうる資料から順次観察・図化し、資料紹介を行っている。今回は、岐阜市芥見の山田川河底において採集された滑石製石鍋などの資料について紹介する。

1. 採集場所・採集状況

紹介するのは、登録番号A-340の壺形土器とともに採集された資料の一部である。資料カードには、昭和56年(1981)9月8日、当時の当館考古分野担当者により、岐阜市芥見祇園2丁目の山田川河底において採集された旨が記されている。

採集された資料は25リットルコンテナ2箱に収納されている。弥生時代後期から古墳時代にかけての壺形土器、土師器台付甕、高坏や、奈良時代の土師器甕や甑、須恵器坏身や摘み付き蓋・甕などが一箱に収められ、もう一箱には山茶碗、土師器皿、石鍋、青磁小片、古瀬戸瓶子、常滑甕など中世以降の資料が収められている。灰釉陶器は見られないが、さまざまな時代の資料が断続的に得られている。量的には中世の資料が主体となる。

河底での採集品であり、小破片が多くを占めるが、ローリングを受けた痕跡はほとんど見あたらない。河川による浸食作用を受けて地中から露出したものではなく、この頃行われた小規模河川改修事業によって出土したものであろうか。

山田川は、岐阜市東部の山塊に源を発し、大洞に広く緩やかな谷を刻み、長良川が形成した河岸段丘と沖積低地を横切り西流し、長良川に合流する。段丘面と沖積低地は5mほどの比高差があり、段丘の上には長山遺跡(G33G07162)が広がっている。長山遺跡は昭和55年(1980)の発掘調査により、12軒の竪穴建物跡など奈良時代を中心とする遺構や遺物が見つかったが(藪

下1982)、その後の試掘調査や詳細分布調査では中世の遺構・遺物も少なからず得られている(内堀1996c)(内堀ほか1998)(井川ほか2007b)。

沖積低地は川沿いに自然堤防、その東に後背湿地が発達しており、芥見町屋遺跡・一本松遺跡(G33G03185)が広がっている¹⁾。芥見町屋遺跡では、自然堤防の南端部において行われた岐阜市教育委員会の試掘調査によって、奈良時代の遺物がまとまって出土している(井川ほか2006)(井川ほか2007a)。また、自然堤防の北部では平成22年度(2010)に岐阜県文化財保護センターが行った発掘調査により、掘立柱建物、礎石建物など鎌倉時代から室町時代を中心とする遺構や遺物が見つかった(平成23年度末に報告書刊行予定)。この調査区は旧渡船場(芥見の渡し)に近接しており、その昔から物流・旅客輸送の場であった可能性が指摘されている。一方、後背湿地では、昭和47年(1972)に行われた一本松遺跡の発掘調査によって、弥生時代後期の焼失竪穴建物跡などが見つかった(大参1979)

今回紹介する資料が採集されたのは沖積低地の後背湿地である。一本松遺跡に近接している²⁾。

2. 資料紹介

滑石製石鍋と2点の土師器皿を図示した。

1は滑石製石鍋である。滑石製石鍋は、滑石をくり貫いて作られた煮炊き具で、主に長崎県西彼杵半島などで生産された。11世紀までは九州一円で用いられる在地的な道具であったが、12世紀末頃から全国に流通するようになる。全国展開するにあたり畿内の瓦質釜に倣って口縁部直下に鏝をめぐらせるなどの形態変化が行われるが、16世紀初頭には姿を消す(木戸1995)。下川は、この消長と文献などから煎蜜せんみつや甘葛煎あますらすんといった甘味料との関わりを想定し、上層階級の生活で用いられたものであるとしている(下川1995)。岐阜県内では、当資料を含めて8点が得られているに過ぎず、飛騨市江馬氏館、郡上市東氏館などの館跡や関市重竹遺跡などの拠点的な

集落からの出土に限られる（小野木2004）。

当資料は口縁部から鏝にかけての破片で、復元される口縁内径は260mmほど。厚さ18mm。残存部の質量279gである。口縁部は内湾する。滑石製石鍋は大量生産にあわせて、播り鉢状の形状となり口縁が外傾していくことから、当資料はやや古いタイプであろう。内面と外面鏝より上部は滑石の銀色が残るが、外面鏝より下の部分は白く変色している。被熱によるものであろうか。口縁部の外縁は、鋭い板状の工具で削り取られた痕跡が残る。鏝は剥落しているが、下方向からの念入りな打撃による除去であり、意図的な加工である。左側の欠損面は、鏝の剥離痕や下部の欠損面と比べて摩滅が著しく、タイムラグが想定される。おそらく、割れた滑石製石鍋が、後に何らかの目的で整形されたのであろう。石鍋の材料となる滑石は、漢方薬とされたり、熱伝導率が低いことから温石として用いられるなど用途は広い。したがって、再加工された時期は、石鍋の編年的な時期とはずれる可能性を想定しておく必要がある。

2・3は土師器皿。採集資料に占める土師器皿の量は山茶碗を凌駕し、特徴的な組成を示す。土師器皿の比率の高さが居住者の階層を示す（小野木1995）ならば、石鍋や青磁の存在も含めて当遺跡の重要性を評価することができる。採集地である祇園以外に、周辺には清水、嵯峨など京都に因む地名が残ることも興味深い。

2は口径122mm、器高32mm。黄白色を呈する中形の土師器皿。丸底で、体部中程まで緩やかに内湾して立ち上がり、そこから屈曲気味に口縁部にかけて外反させる。体部上方は内外面とも横ナデが施され、外面はナデの幅17mm、内面は22mm。体部外面は屈曲部以下に指頭圧痕が2段に、内面は底部周縁に指頭圧痕が残る。

3は口径89mm、器高16mm。黄白色を呈する小形の土師器皿。湾曲しながらわずかに立ち上がり、その狭い体部外面に5mmほどの幅で横ナデが施される。内面の横ナデは幅17mm。口縁端部は丸く収める。

2は小野木分類のB2c類に属し、3はA2c類に属する。いずれも山茶碗6～7型式併行（13世紀中葉～後葉）に位置づけられる（小野木1997）。

以上、長良川左岸、芥見町屋遺跡の後背湿地における中世に属する資料群の一部を紹介した。これらの資料から、この地に階層の高い居住者が存在した可能性を示すことができた。昭和50年代には老洞古窯跡・大畑遺跡・長山遺跡と芥見地域での古代遺跡の調査が相次いだ。当資料が得られたのもそんな時期であった。近年また、岩田・芥見地域での発掘事例が増加し、興味深いデータが蓄積されている。こうした調査成果とあわせて、この報

告が地域の歴史解明の一助となれば幸いである。

本稿執筆にあたり小野木学氏よりご教示いただきました。感謝いたします。

註

- 1) 従来の調査において、自然堤防上では古代・中世の資料が主体を占め、後背湿地では一本松遺跡の弥生資料が代表的な資料であった。芥見町屋遺跡を自然堤防、一本松遺跡を後背湿地として区別してとらえることも可能であろう。しかし、今回の山田川河底採集資料は中世を主とし、芥見町屋遺跡の範囲が後背湿地まで広がることが確認された。ただし、一本松遺跡を芥見町屋遺跡の一部として良いかは検討を要する。今後の調査次第ではあるが、芥見町屋遺跡一本松地点とするのも一案か。
- 2) 登録資料の壺形土器は、口頸部を欠損するが胴部はまるまる残る。器壁は薄手で下ぶくれの形状。採集地に近接する一本松遺跡では弥生時代後期の資料が出土しており、この土器も同期に位置づけられる。ただし、山田川河底採集資料には該期の資料が少なく、一本松遺跡が東に広がらないことを示している。

引用・参考文献

- 井川祥子・山口早苗・森田一樹2006「芥見町屋遺跡」『平成16・17年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団pp.55-57
- 井川祥子・恩田裕之ほか2007a「芥見町屋遺跡」『平成17・18年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団pp.38-39
- 井川祥子・恩田裕之ほか2007b「芥見長山遺跡」『平成17・18年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団pp.39-41
- 伊野近富 1995「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社pp.225-244
- 内堀信雄 1996a「岐阜市における古代～中世の集落遺跡の動向」『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』岐阜市教育委員会pp.40-46
- 内堀信雄 1996b「芥見長山遺跡」『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』岐阜市教育委員会pp.33-35
- 内堀信雄 1996c「芥見長山遺跡」『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』岐阜市教育委員会pp.33,35,37
- 内堀信雄・井川祥子1998「長山遺跡」『平成9年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会pp.4-6
- 大参義一 1979「一本松遺跡」『岐阜市史 史料編考古・文化財』岐阜市pp.64-67
- 小野木学 1995『下中上遺跡』財団法人岐阜県文化財保護センターpp.142
- 小野木学 1996「角之御前遺跡出土の中世遺物について」『美濃の考古学』創刊号pp.115-132
- 小野木学 1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号pp.115-132
- 小野木学 2004「二ノ井遺跡の中世遺物～中国産天目茶碗と石鍋～」『きずな』岐阜県文化財保護センターpp.6
- 小野木学 2011『中屋敷遺跡・中屋敷古墳』岐阜県文化財保護センター
- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土

器研究会編 真陽社pp.511-521

岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』

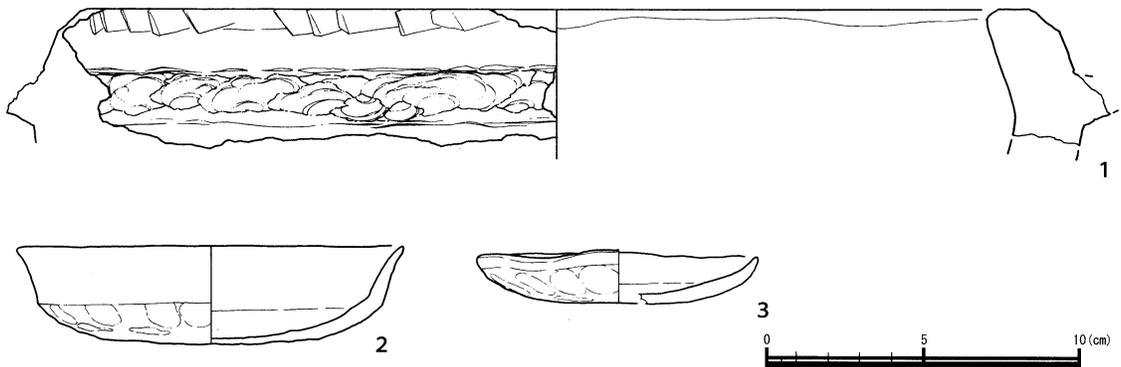
下川達彌 1995「生活を変えた職人達石鍋」『中世の風景を
読むー7 東シナ海を囲む中世社会』新人物往来社
pp.163-188

藪下浩 1982『長山遺跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会

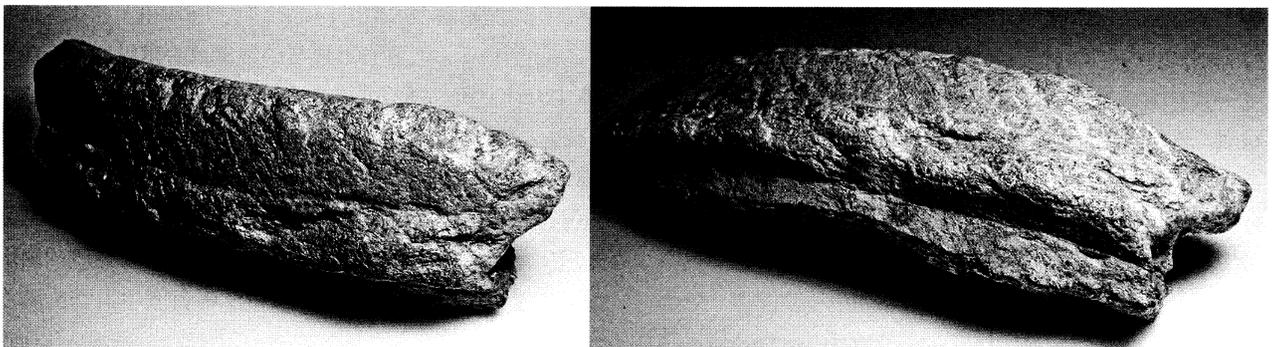


第1図 資料採集地（山田川河底）位置図

岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』「岐阜33 岐阜」に加筆 scale1/50000



第2図 山田川河底採集資料 石鍋 (1) 土師器皿 (2・3)



第3図 石鍋口縁部の削痕 (左) 石鍋鐔の除去状況 (右)